

深川の料理茶屋～水辺の行楽地として～

1. 景勝地深川と料理茶屋の広まり

爰こゝに深川といへる所は、江城の東に當て甚景地なり、北に本所、南は海にして其景言葉に演がたし、春は永代寺の華盛りにうきをわすれ、夏は洲崎の涼、安房上総を見はらし、其外海上の釣舟筆にも写しがたし、秋は木場小名木川鮎砂魚など釣る人、山の手邊より毎日毎日来ること夥おびただし、又名月の水面に移る気色、翁も首をかたぶけ、冬は雪見に俳譜など好める人、詩杯に志ざす人、遠近をいとわず群集なすこと、市にむかふがごとし、遊里はやぐら下踊る等日本一にして、風俗格別しほらしく、……二軒茶屋の三味線に足本のつまづくをしらず、……産物は鮎はも又鱧のかばやき、洲崎のざる蕎麦、材木町山登屋其味甚美也、……

これは宝暦10年に書かれた『深川珍者録』の序の抜粋です。海を臨み、縦横に川や掘割がめぐらされていた水辺の景勝地としての様子が情緒豊かに語られています。そしてその風情を求める他所からの人々が多くあること（下線）、またそれらの人々で成り立っていたであろう名店・名物の紹介が続いています。

『資料館ノート15号』で、江戸時代、料理茶屋の増加を支えた一因に、庶民による信仰・行楽を兼ねた寺社参詣・周辺名所の散策の普及があったとのべてありますが、このことは今回取り上げる深川に関しても同様で、上記の一文からもそれを見て取ることが可能でしょう。

特に深川の場合、富岡八幡宮、永代寺の山開き、洲崎の潮干狩り、隅田川などでの川遊びといった名所をはじめとして、江戸湾・隅田川・無数の川や堀の中にある水辺の景勝地という土地柄自体が人々を引き付けていたと思われます。料理屋や花街に舟で通うなどといった楽しさも、

また江戸前の魚を味わえるのも深川の魅力の一つだったと言えます。

2. 永代寺（富岡八幡宮）の門前町

現在の地下鉄東西線門前仲町駅周辺は、永代寺の門前町として、深川の中でも早くから参詣客相手の茶店が立ち並び賑わったところです。永代寺や富岡八幡宮では、山開きや成田山不動尊の出開帳（1703年が最初）などの年中行事が開かれたため、江戸から多くの人々が参詣に訪れました。

そして初めは、簡単な造りの出店や茶屋だったのが、享保の頃からは料理屋や置屋・揚屋も増えて花街として栄えるようになりました。『江戸名所図会』（1836年）はこの門前町の様子を次のように記しています。「当社門前とりい一の華表より内、四町が間は、両側茶肆・酒肉店軒を並べて、つねに絃歌の声絶えず。ことに社頭には二軒茶屋と称する貨食屋りょうりやなどありて、遊客絶えず。牡蠣・蜆しじみ・花蛤・鰻鱺魚はまぐりの類をこの地の名産とせり。」

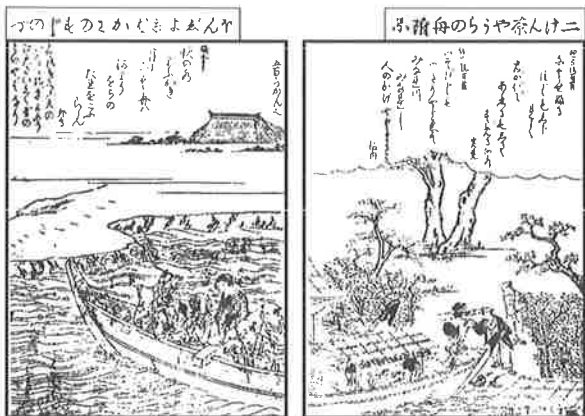


絵①『絵本東わらは』より

そして、この門前の中でも二軒茶屋と呼ばれた松本・伊勢屋の二軒、土橋（八幡宮の東側）の平清は高級料亭として有名でした。

【二軒茶屋】

松本と伊勢屋の二軒のことを言い、富岡八幡宮本社の裏、現在の数矢小学校前辺りに松本、東よりの弁天池の後ろ辺りに伊勢屋がありました。絵②からもわかる通りすぐ裏に舟をつけることができましたようです。大田南畝も寛政4年二月に立ち寄った時のことを『花見の日記』の中で「富ヶ岡うら手より舟にて二軒茶屋に入り、米人酒饌を供す。則あないして永代寺の僧に園女桜をみん事をこふ。」と書き留めています。



絵②『絵本続江戸土産』（広重）より
（たばこと塩の博物館蔵）

但し、これらの店は深川花柳界を背景とする高級料理屋で一般庶民向けではありませんでした。共に天保の改革で廃業しましたが、松本は再び開業し明治以降まで残りました。

【平清】

『守貞漫稿』（1867年）や『寛天見聞記』により、文化の頃から流行した店であることが分かります。平清は、永い間繁盛し明治に入っても続いたこともあり、史料にも多く記されています。

『守貞漫稿』は、江戸で有名な料理屋として山谷八百善を第一、「深川八幡宮前の平清がこれに次ぐ」とし、『江戸繁盛記』は「橋西箇の一大酒樓を平清と曰ふ。深川烹家の巨擘」としており、その興隆ぶりを推し量ることができます。

3. 洲崎の升屋

洲崎はその突端に弁天社があり、土地全体が

海に突出して風光明媚であったことから初日の出・潮干狩りと遊客が後を絶ちませんでした。以下、このような地で、約20年余り続いた升屋の繁盛ぶり、そして大津波による廃業を、史料からみてみます。

『蜘蛛の糸巻』（山東京伝著）

都下繁昌につれて、追々食店多くなりし中に、明和の頃、深川洲崎に、升屋祝阿弥と云ひし料理茶屋、……諸家の留守居者の振舞といふ事、みな升屋を定席とせり。其繁昌、今比すべきなし。

『古契三娼』（天明7年刊）

（お仲）いまじゃア枳屋がはつかふさ。いまの惣介さんがりかうもの（利口者）さ。……

（お吉）祝あみさんはみんきよ（隠居）したかへ。……

◆初代祝阿弥から惣介に代がわりしても繁盛していたようです。

『江戸砂子補正』

洲崎辨財天、寛政三辛亥年八月五日、南風南津浪辨天堂倒掛落左残、……ざるそば商家は戸居計算残り、人不_レ残人_レ海、枳屋少し家残り、生簀家不_レ残、此邊の抱やしき別業家作不_レ残

◆この津波で升屋は廃業となりました。



絵③『江戸名所図会』より

4. 料理茶屋の移り変わり

江戸時代後期、天保の改革など時代の流れの中で、ここにあげたような料理茶屋は衰退しましたが、その後も深川を訪れる人々の要望に応えるため新たな名物・名店があらわれ、現在に至っています。